

## 第5分科会 第2分散会

### 「重複障害者のくらしを地域で支える」

共同研究者	千葉県聴覚障害者センター	増田 伸也
助言者	東京都聴覚障害者連盟	大石 欣也
司会者	びわこみみの里	太田 貴士
	たましろの郷	中山 宝

#### 1. はじめに

第5分科会第2分散会では28名の参加者により、2日間で3本のレポートを報告し、討議、情報共有を行いました。現場支援員等、施設従事者、家族関係者、通訳、その他幅広い参加者により、情報交換することができました。

#### 2. レポートの報告

##### (1)「意思形成から意思疎通へ」

社会福祉法人 千葉県聴覚障害者協会  
らいおん工房 森 美子

ここでは本分科会の討論におけるキーワードとして「通じている」→「通じている(つもり)」というのが挙げられ、実際の現場からの声として3本のレポート報告に共通したものでした。

地域で生活し、らいおん工房に通所している聴覚障害者Aさん、通所して5年で手話の語彙も増え、聞こえない集団で意思疎通できるようになった。そんなAさんが通所中自転車でトラブルにあったことを十分に説明できず、手話、文字、文章で繰り返し対話する中で、車との接触事故に遭い、警察に調べられたということがわかった。対応した警察に本人が聞こえないために話し言葉が通じないことを伝えると、筆談に頼いたので理解していると思った、聞こえないだけではなく他の障害も重なったろう重複のため言葉に対する理解が得られていない面を知らなかったとのこと。施設内では十分に意思疎通できる環境にあるが、一般社会では環境、理解の面でもまだまだ困難な状況にある。

また、精神的な支援を必要とするろう重複・ろう高齢者の対応では、相談支援専門員が通訳のつなぎを兼ねて、医療・行政など公共機関も巻き込み、意思疎通・障害特性への理解普及、居場所づ

くりを進めていることが報告されました。

##### (2)「SSTの実践」

いこいの村・栗の木寮 前川 恵子

いこいの村栗の木寮では、服役経験のある入所者の事例をきっかけに、2名の利用者を対象としたSST(ソーシャル・スキル・トレーニング)を行った。

Tさんは服役に抵抗がなく、無断外出も少なからずあった。管理中心ではなく、本人と成育歴・経歴などを話しながら、カウンセリングも取り入れた支援に取り組む中で、利用者集団の力を取り入れたグループワークとしてのSSTを実施した。「約束、挨拶、時間」などの例題をもとに相手の立場を考えるトレーニングを行った。その結果、相手を考えられる事例も見られたが、頼まれたことを無理してでもやろうとする等課題もあった。他者や自分の気持ちを理解して、心の動きを知ることにより自己のコントロールにつなげることを目標にSSTを実践した。今後も定期的に取り組み、福祉・医療・行政が連携した支援を進めたい。また、Tさんの事例に限らず、累犯事例の受入についての課題があることを報告されました。

##### (3)「第1どんぐりホームの移転」

第1どんぐりホーム 主任 越後 靖一

第1どんぐりホームでは2001年の運営開始から18年が経過し、利用者の高齢化や建物の老朽化、スプリンクラー設置義務化に対応するため、今までのアパートから一戸建て型のホームに移転した。移転にあたり、家族会、施設従事者によるプロジェクトチームを立上げ利用者、家族の要望、職員の意見を設計に取り入れた。土地・建物の選定にあたって、取引先の金融機関から地元の建設

会社に打診して、建設会社の敷地にホームを建ててもらい、20年間の賃貸契約。スプリンクラーは埼玉県の補助を受けて設置し、初期投資を抑え、家賃、食費等の利用料を移転前と同額に据え置くことができた。

アパート形式から一軒家になり1階に男性、2階に女性が入居し、加齢による身体状況に対応したきめ細かい支援ができるようになった。引っ越してから食事の準備など自主的に参加するようになり快適に生活しているが、個別の浴室やトイレが良かったという利用者もいて、一人ひとりの要望に応じた生活環境を整えていくことが課題と報告されました。

### 3. 討論内容

レポート報告をもとに、参加者一人ひとりの感想、地域生活の現状や課題等を輪番で発言してもらい、全員で情報共有しました。

最初に共同研究者により、①ろう重複者の意思疎通・障害特性の理解普及、②障害福祉から介護保険に移行する65歳問題、③学校卒業後、同じ障害のある共同体がなくなり孤立してしまう問題、3つの課題を討論の方向性として設定しました。

①ろう重複者への理解普及：地域に周知していくため、施設内外の行事で交流や避難訓練に消防署も参加したり、手話教室で交流したりしている事例、緊急時の連絡カードや手話通訳派遣体制等の状況が報告されました。一方、行事に参加した際、利用者に腕時計をつかまれて怖い思いをした体験も伝えられ、ポジティブな視野に立ってみてその腕時計に興味があるという捉え方で考えではどうか、という意見もありました。

②ろう高齢者の65歳問題：複数の参加者から事業所に65歳を過ぎて、まだまだ働きたいと思っているろう高齢者が一定数在籍していること。サロンのような居場所づくり、交流の実践が伝えられました。また、ろう高齢者の中でも認知症傾向があり、物がないと訴えに職員が自宅まで支援に行くケースや体調不良の訴えが明確にできず、思考錯誤しながら対応しているケースが伝えられました。

一方、行政に働きかけて障害福祉と介護保険サ

ービスを併用している報告もあり、障害福祉と介護保険サービスの併用は本来容易ではないことからニーズの説明力が必要という意見がありました。助言者から地域との関係形成や、事業継続性が必要とアドバイスもありました。

### ③学校卒業後のろう重複者の居場所、つながり

家族の参加者から、在学時は学校集団があり相談もできるが、卒業後の相談先や情報共有し合えるつながり、居場所づくりに課題があること。ろう重複者を対象とした社会資源・情報に地域差が非常に大きく、どこに相談すれば良いのか悩みなながらも、連携を取り今後につながる状況が伝えられました。

ろう重複のケースとして成育歴、コミュニケーションの問題、集団形成が大きく影響すること、卒業後の居場所づくりに課題があり、親への情報共有、連携を並行して進めることが大切と意見もありました。

### 4. まとめ

3本のレポートから、それぞれの障害当事者の状況や支援者の取り組みについて報告を踏まえ、地域でくらすろう重複・ろう高齢者と支援者の現状や課題を共有することができました。

本報告の冒頭で指摘している（通じているつもり）事は利用者に対してだけの問題ではなく、地域社会に対しての問題でもあり、どのように対処していくか、運動体と一体となり考えていく必要性もあると思われます。また、“ろう重複”への対応の専用マニュアルは存在しないことから事業として支援を継続していくためには、施設移転などの障壁も発生する事を念頭にコミュニケーション関係をビルド、リビルドしていく取り組みも必要となるでしょう。

ろう重複・ろう高齢者が地域でくらし、働く、人間として当たり前の権利を保障するために、「意思疎通できる集団」や「安心できる居場所づくり」を大切にしながら、当事者主体の支援を地域に持ち帰って、実践につなげ深めていきたいと考えます。ろう重複に対するコミュニケーションの基本は、相手と同じ目の高さにすることに原点があるといえましょう。